

ふみこ放浪

(ひとり芝居)

脚本 角ひろみ

(この戯曲は、演じる俳優が身ひとつで各地へゆき上演する企画のために考えました。
例え音響や照明がない場所でも、例え狭い店などの隅とかでも上演できるように、
最小、原稿用紙一枚ぶんのところ立ってやれるように、仕組みを考えました。
めまぐるしく放浪して過ぎる、作家・林芙美子の生と死の劇)

俳優、裸足で出て立つ。物や音は何もない。

みなさま、今日は本当にありがとうございます ただ今より、ふみこ放浪、はじめま——す

ふみこ、礼。顔をあげると、

ふみこです 私は宿命的に放浪者である でおなじみの林芙美子でございます

目覚めたら河原にいた どの河原？ 絶望的に覚えがない ぼうぼうと暴風が吹きつける

ふみこ、立ち尽くしている。

今、私は宿命を恨む なぜか一步も進めないの！ 足の裏が土にはりついている

馬鹿な！ ふみこだよ！？ 世に有名な放浪のふみこですよ！？

どうしよう 今日も×切があるなのに紙もペンも何ン——にもない！

瞼の中に大量の文字が飛ぶ 忘れないように今つぶやいて 粒にして飲み砕いています

ふみこ、^{くう}空をつまんで噛み砕く。

——ぼりぼり

…淋しく候 腹がへったで候 お手洗いへゆきたいで候

ふみこ、ゆこうとするがゆけない。

どうして？ 馬鹿たれ 馬鹿たれ 躰の中で宿命が猿のように叫ぶ 放浪 放浪したい たまらない

ねえふみこ放浪したい コンチクショウ！ その時、ゴトンゴトンと川に架かる鉄橋を汽車が渡ってきた

「ふみこ 降りんかや」あ …お父さん！？ 父は本当の父ではない

「ふうちゃん 海と坂の町尾道たい！」あ …お母さん！ 私は母の連れ子である

私は古里を持たない 小学校もろくに行っていない

一家三人、家もない 各地を放浪する旅商人でございますー！す♪

♪オイチニイ オイチニイ オイチニイの葉は夢の葉—

父がボロい風琴を弾き鳴らす 棧橋に人がたかる ヘンな歌

♪みるみるきくきくオイチニイの— 葉葉葉—

わびしい母と私は波止場へとはぐれてゆく ねお母さん！ 出店で蛇を焼いとる 「蛇とな？！」

ほら身の長え—蛇 「ありゃあ鰻—いうと」食うてみたかァー！ 「こぎゃん貧乏しよるとに！」

鰻—鰻鰻鰻うな「こん子はッ」痛ァ！ びんたば 鼻血—鼻血鼻血はな「おいっ 鼻血んぼう—！」誰？

学校帰りの知らん子らが笑う「♪オイチニイのルンペンの娘んぼう—」「帯がとけとるとどお—」

「尻が見えとるとどお—」

ふみこ、裾をバツと押さえつける。

…どこさか行ってしまいたい 「どこさかいうて」追いつけんどこさ一人はぐれて行きたい

「追いつけんどこことな」え—そげん— それはァー 東京！ 「東—京—となッ ふうちゃん！」

東京で—、女成金に私はなる！ それがふみこの野望でございま—す♪

ふみこ、拳をあげる。

「ふみこ 学校さ行かんか？」お父さん！ 山ごつ売れたと？「お前は本ば読みよるで小学校さ」行かん

もう晩な 鰻ば食わんとかい？「またふうちゃんはめしんこつばあ！ 学校さ」学校の子らあうるさかけん

「何がうるさかと」云わん「云え」云いとうなか「云わんか！」云わん云わんいわ「もうええッ 寝るッ

寝れッ」(小声)寝れるかッ 毎晩あちこちの不潔な宿で、三人一つの布団で寝れるか いやらしい

「何て ふうちゃん」何もなか …あ— ひもじい

ふみこ、窮屈そうに身を丸めて、

暗い夜 母と義理の父と^{ぬく}温め合う布団の中で、私はたくさん物語を読み詩を書いた

風船玉のように浮かぶたくさんの錯覚を愉しんだ ふふふ カチューシャ、そこへ腰掛けてくれ

そうよモスクワへ 早くモスクワへねえ— いえ 一切れのパンを盗んだだけです

ふみこ、見上げてはつぶやき、空をつまんで^{くう}噛み砕く。

—ぼりぼり

「何ば食うとるかの ふうちゃん」粒じゃ 「粒？」口寂しかけん物語の粒ば食うとる

「ほんっに 口いやしか子たいねえ—」夢の葉たい！ ♪みるみるきくきくオイチニイの— 葉葉葉—

—ぼりぼり

ふみこ、もぐもぐと咀嚼しながら、

ああ 鉄橋をまた汽車が通り過ぎてゆく 暴風はさらに強まっている 川の流れば速さを増してゆく
そうして逆転 ふみこは貧乏人が行けば人の笑う高等女学校まで出たのでございまーす♪

ふみこ、髪をわしゃわしゃと撫でながら、

「ふうちゃんは天才たいねえー」

「ふみこはがんばったがやー自分で学費ば稼ぎながら」

笑え笑え 私はどんな境遇にも災いされない道をゆくのだ

ふみこ、手を止めて、

ふみこは野望の東京に出たのでございまーす♪

十八で一人 詩人を目指して いや嘘 一人は嘘 詩人も嘘 実は 「ふみー」

——わ あそこ 川向こうに人がいる

ふみこ、手を振る。

実は恋であった 文学好きの因島の男 兄さーん ずっとそう呼んだ

実は私を東京に抱き寄せたすべてが恋で「結婚してつかあさいー」——へ

ふみこ、そろりと手を下ろす。

雑司が谷の下宿 ふたり重なって ひとつの林檎をかじり合っていた ね兄さん 今なんて

「いい縁があったらの、結婚してつかあさい わしなどあてにせんで」

え やだ兄さん 「親と姉がの、大学出たら島帰って働けて」嘘 言われたんでしょう

放浪の家の娘を嫁になど許さんって 「すまん 親と姉がの」あやまらんで！

ね兄さん かけ落ちましよう どこさか追いつけんところへ

「わしゃー長男じゃけえ 田舎じゃ墓と土地が待っとる」う 潮くさい息がかかる

——あそっか 超え難い境界がある 私の境遇と世の真人間の間には、太く厳しい川が横たわっている

もうッ また暴風が吹きつける え あれ？ なんで？ 足先が土に埋もれてる

ふみこ、脱しようとするが、脱せない。

兄さんー

ふみこ、手を伸ばす。

今、川を渡ってこっち来て！ 私の手を掴んでここから助けて「ふみー こらえてつかあさいー」

兄さんー兄さん兄さんにいさ 島の男が川向こうに去ってゆく

ふみこの東京はいきなり破綻したのでございまーす♪

ふみこ、なんか変てこに何度も身を横に打ち付けながら、
えいッ えいッ 雑司が谷霊園で墓石にお腹をぶつけて泣いた えいッ あんな男の子供を生んじゃ困る
ばかッ 田舎者め 素朴な顔して、よそ者を徹底的に排除する
ばかッ 先祖代々の潮臭い土地や墓を守って死んだって何になるのッ?! 何のッ 発展もッ ないよッ!
ハァー ハハハハ… 痛い痛い痛すぎるー

ふみこ、腹を押さえ、足元を見る。

——嫌だ私 ——一ツ所で埋もれて生きてゆくなんて

ふみこ、屈んで、足元の土を掻きながらぶつぶつと早口でつぶやく。

私は書いた 慰めに書いた ハタチだった

六月×日 帯の間にしまった二通の履歴書は、ぐっしょり汗ばんでしまった 暑い

六月×日 こんど生活が楽になりかけたら、幸福がズルリと逃げないうちにすぐ死んでしましましょう

七月×日 夜 壁に凭れると男の匂いがする

七月×日 大分仕事にも馴れた

七月×日 家へかえると八百屋と米屋と炭屋のつけが来ていた

書くことが心の避難所だった 歌日記と名付けて書いた

男に捨てられた歌 貧しくて 空腹の歌 家もなくて 生きるのでぎりぎりの歌

働いて働いて 書いて書いて書きためた、きれぎれの東京の日々の束

ふみこ、掻いた土を集めて両手にする。

——それがふみこの、「放浪記」でございま——す♪

ふみこ、両手にしたものをバツと撒く。

ふみこ、足を動かそうとするが、動けない。

ああ 神様コンチクショウ それでもやっぱり逃げられない

九月一日 大地震がやってきた 東京はめちゃくちゃだ

九月×日 今日もまた野宿 隣でもたれてる大学生に声かけた

ね見て 無気味な暗い雲 新宿まで歩いてくの 大丈夫かしら

「水道橋までおくりましょうか」青年は瓦礫に突きさした蝙蝠傘を取った

ふみこ、傘を広げて、くるくると、

くるくる傘を回しながら降ってくる灰をはらって歩く

♪東一京の中枢は丸の内ー 日ー比谷公ー園両議院ー（東京節）

「何です ヘンな歌」たまらない ここだけ二人きりの防空壕みたいで

（大声）♪いーきななかまへの帝劇にー いーかめし館は警視庁ー 省官庁ズラーーリ

「よくもこんなに焼けたもんですね」青年は蝙蝠傘をくるくる閉じると私に突き出した

「これで五十銭貸してくださいませんか」あなたもお腹がすいてるのね

ふみこ、胸元に手を入れて、握って出す。

ハイ どうぞ お礼の札束

ふみこ、指をほどく。

フフ 何ァーンにもない 「ハハ 地震で素敵だな」どこが 見渡す限り何ァーンにもないのに

「僕はね 東京が 原始に帰ったみたいでとても面白いんですよ」青年はくるくる笑った

美しかった女性群が、みんーな灰になって裸足で歩いている

——あ あれ いつの間に？ 脚がもう、ふくらはぎまで土に埋まってる なんぞえー？！

ふみこ、屈んで土を掻く。

書いても書いても、書いたそばから揺れて埋もれてしまう

え 気づかない間に一直線に、私は地割れの中に沈んでいってるんだらうか

ふみこ、足元を見つめる。

ないないない もたついているわけにいかない 明日から今から飢えていく私たちである

笑って暮らしましょう！

ふみこ、パンと身を起こす。

ふみこは朝から晩まで働いたのでございまーす♪

ふみこ、なんか変てこに弾んで駆けるように腕を振り、

偉い作家の子守女中 お菓子工場 露天商 毛糸屋の売り子 牛屋うしの女中

転々と職を変え宿を変え、その日その日をきり抜ける はあー 女成金にも詩人にも程遠い

いつまでこんな馬鹿な生き方しなきゃいけないんだらう

ふみこ、目を奪われて腕が止まる。

わあー 日比谷のお堀には帝劇の灯がキラキラしている 程遠い世界だなあ

きっとねえ あの中ではレビューの踊り子の白ーい脚が揃って、この世のロマンを踊ってる

イーッツ ショウターイム！

ふみこ、裾を上げながら歌う。なんかレビューのような手振りで踊る。

♪かわいいあの娘は— ま—る—でメロディー 僕の一 心をとらえる 昼も一夜も—
はちきれ—そうに— くり返し—浮かぶ— あ—の娘が— や—さしく— ほほえみ…

(ジグフェルドフォーリーズ「A Pretty Girl is Like a Melody」 日本語詞=角)

ふみこ、ぱたりと踊りの手を下ろして、素に戻り、

ロマンって！！ みんな嘘っぱちの世界だ 飢えて朦朧とする …男 男の人にすがりたくなった

ふみこ、胸元を少し開けながら、

ロマン— 誰か こんな躰でも買ってくれる人はないかな 「ふみちゃん 僕が買った」

わっ わっ わかおさあ—ん?! 嘘 元芸術座の俳優の 「ねえふみちゃん」

ふみこ、ロミオのように片膝ついて手を差し出す。

ひっ 膝っ 「僕のために書いてよ 役者わかおの一世代の名作をさ」ロマン—

ふみこ、手の甲に接吻する。

—惚れた

ふみこ、ハッと手を押さえ、

ああわかお あなたはどうしてわかおなの コロリとふみこはわかおさんと同棲したのでございま—す♪
わかおさんは私を、文学者の楽園に連れ出してくれた 本郷白山^{はくさん}の書店南天堂^{なんてんどう}

ふみこ、立ち上がって、

「妻で詩人のふみこさ」つつ 妻?! どうも—

「南天堂はさ 文学史に輝くアナキストや ダダイストや シュルレアリストたちのたまり場さ—！」

めくるめく出会いだっ 刺激だっ 快感だっ

私わかってきた 話をするように書けばいい

食べたいときは食べたいと書き、惚れている時は惚れたと書く！

ふみこ、またなんか変てこに弾んで駆けるように腕を振り、

ふみこは日夜書きに書き、わかおさんのために働きに働いたのでございま—す♪

空きっ腹でくらくらの快感 疲れて帰る快感 戸を開ける快感！

ふみこ、引き戸を開ける。ハッと両手で口を押さえる。

(小声) あ …わかおさんが 若手女優と 魚のようにもつれあっている

荒波を打つ蒲団 古新聞に食べ汚^{よご}したたい焼き

わかおさんー そんな若い肉を抱いて腹を満たしていたのか

悔しい こんなたい焼きでも掴んでむしゃぶりたい私

ふみこ、床のたい焼きに手をのばして掴んで、

(小声) わかおさんわかおさんわかおさん わかおおー

二匹の魚がキョロリと見上げる 「あら どなた?」「おう… 新入りの作家さ やあ」

——やあ

私はたい焼きの手で、笑い返してしまった 茶番だ!

ふみこ、たい焼きを投げつけようとするが、むしゃぶり食いながら、

馬鹿 馬鹿 馬鹿 馬鹿を千も万も叫びたいほど切ない私である もう無茶苦茶な世界への駆け足だ

十五銭で接吻しておくれよォー 酒場で駄々をこねて飲み散らした

「ふみこさん 十円でどうです」印刷工のまつださんー

「ふみねえさん 黙って僕を愛してください」画学生のよしださんー

「ふみさん 詩集の出版費僕が出す出すー」ボンボン学生のかんべくんー

男という男はみんななくならないじゃあないの バクレツダンでも投げつけてやりたい

ふみこ、足元を睨んで、

地球よ パンパンとまっぷたつに割れてしまえ

と、呶鳴ったところで 私は一匹の烏猫だ 世間様は横目でお静かにお静かにとおっしゃっている

また寂しい寝覚めなり ふー

ふみこ、煙草を吸って、

「おふみ こっちむけッ」あ …南天堂で会った詩人の「のむらだ 俺んどこ来い 二人並んで書けばいい」

のむらさんは煙を虹のように私の顔へ吐きかけた

ふみこ、煙を吐きかけて笑い、

「ふうー 詩人は共喰いだ」ロマンー

ふみこ、煙草の手をハッと手を押さえ、

——惚れた

ふみこ、手に接吻して、

多摩川 がらんとした四畳半 のむらさんー 唇がばかに赤い 「肺病病みの唇だろ」…へ

狂暴な男の唇は、私の唇を噛んだ …あ のむらさんは血を吐いた

ふみこ、服を整え髪をまとめながら、

ふみこはこのむらさんのために、ついにカフェの女給として住み込みで働いたのでございませう♪

私はもう新宿金の星のゆみちゃんでもございませう♪

ふみこ、高くグラスを上げ、

ねえー！ キング・オブ・キングス十杯飲めたら十円の賭けだつてー？！

(小声)「ゆみちゃあーん やめでエ」女給仲間のときちゃんが止める　ときちゃんー平気平気ー
社長さん十円絶対よ　せーのッ

ふみこ、次々グラスを空けながら、

「ゆみちゃん　ゆみちゃん　ゆみちゃん　ゆみちゃん！」「おふみッ」

…へ　のむらさん…　何で店に「何してんだお前」今いいところ！

(飲んで)「ゆみちゃん　ゆみちゃん　ゆみちゃん！」

ふみこ、飲み干したグラスを高く掲げ、

イエーイ十円の勝ちだァー　キングオブキーング！「おいッ！！」

ふみこ、グラスの手をパンと掴む。

何ッ　「しなだれて愛想売りやがって」へえっ？！（手を振り払って）アンタと食うためじゃない！

「淫売ッ」してないッ　よくまあ店の女給のみんなの前でそんなこと

「淫売同然だろー？！」　誰も好きでやらない

食い詰めたら淫売だつて何だつてするしかないよねえみんなァー？　「この赤豚ッ」

ふみこ、後に無様に撥ねつけられる。

「一人前の事云うな豚が」　のむらさんの圧力が、豚の胸をしめつける

(笑って) 金だ金だ金が必要なんだ　ゼエーんぶ肺病のせいよねえ　「黙れッ」

ふみこ、髪をひっ掴む。

「ゆみちゃああーんッ！　にっ　二階^{にが}いで団体さんが呼んどられますうー」ときちゃああーん

「ごみかすッ」のむらさんは　私を壁に叩きつけた

ふみこ、髪を掴んで横とかに撥ねつけられ、身を屈する。

♪寝ては夢起きてはうつつ～　幻の～（大声で浪曲　紺屋高尾）「うるせえッ」

ふみこ、背中を踏みつけられる。

ああ　貧乏が　私たちの身も心も食い荒らす　憎い　でも燃える　神様もっとぶちのめして下さい

豚はそれを書いてやる 血へどを吐いてくたばるまで 豚は何度も神様の下宿をたずねる 共喰いだ

ふみこ、しゃがみ込んだまま、封筒を差し出す。

——これー お金ー 今週のー 「ありがとおふみ お前だけだァー」

ふみこ、なんか変な体勢になってゆきながら、

のむらさんは、プリプリと涙の盛り上がる私の顔を吸った

のむらさんっ のむらさんのむらさんのむらぁー

ふたりは 他人にはわからぬ形でもつれにもつれてしまった

ふみこ、服を整え立ち上がりながら、

…じゃ、店帰りまーす 「店は通いにしろ また一緒に住めばいい」 うん またそのうち

「は?! そのうちーッ」また逆上する 灰皿を私の胸へ投げつける 灰が炸裂する

エホッ エホッ エホッオエーッ のむらさんが血へどを吐いた

「おふみさんッ 何したの?!」ご近所作家のたいこさんが駆け上がってきた

「血ーッ?! のむらくんー?!」「出てけーッ」はぁッ!?

ふみこ、頭を抱えて身を屈する。

——ナイフが飛んできた ——ざくりと ナイフは足元に突き刺さった

ハァー ハハハ あのねエー いいこと教えよっか さっき下でねエー 詩人のおかもとさんに会ってエー

十五銭で接吻してきたんだァー 「エホッ ごみかすッ」アンタの百倍良かったよ

もう金なんかビタいち持ってこない 殴られて薄馬鹿な顔してるのはたくさんだ

ふみこ、床のナイフを抜き取って手にするが、背後で、

「おふみさんッ」…たいこさぁーん (小さく)「やれ」

じゃあね

ふみこ、ナイフを投げつけて、そっと引き戸を閉める。

死ね のたれ死ね おかしい私が死にそうだ 昨夜^{ゆうべ}からめしも食べてない!

「またふうちゃんめしんこつばぁー!」あ …お母さぁーん この世は食べてくことばかり

愛情なんてありようがなかと? 私は失敗 失敗失敗だらけ 目がぐるぐるすったい

あー鰻鰻鰻鰻ば食いたかぁー

ふみこ、^{くう}空をつまんで噛み砕く。

ぼりぼりぼりぼり ぼりぼりぼりぼり 夢の薬じゃ全然足りない! 逃げ込む先もない

ふみこ、足元を見る。

いや とっくに気づいてる 私は泥の中にめりこんでいる カフェーの女給にどっぷりだ

ふみこ、レビューのようにひらひら手を降ったり、頭を下げたり、投げ接吻したりながら、
ふみこはからっぽの酔いどれ女でございまーす♪ お客様、今夜も十円ありがとうございます♪ …

(小声)「ゆみちゃんはそれでいいのだが？」へ… 平気だつてえーとき坊ー!

ときちゃんの大きな目が真横で問い詰める

——雑魚寝の女給部屋 たくさんの女が折れた鉛筆みたいに空しく転がっている

(小声)「あだし知ってるのよ 枕の下 ゆみちゃんが毎晩寝ないで書いてるこど」へえ…?!

「七月×日 なんどがどうにがでぎないものが 死ぬまでカフェーだの女中だの ポロガス女になり果てる」
読んだなァー「♪歌日記」フフフフツ 返してッ

ふみこ、何かきゃあきゃああと寝床で帳面を取り合って開き、

「一月×日 みんな本当の、はらわだをつがみ出しそうな事を書いてるのに一銭にもならない」

どんな事を書けば金になるのだ

「三月×日 とぎちゃんのお母さんが裏口へ来でいる とぎちゃんに五円貸すなり」

せぐりあげてもせぐりあげても泣き声がやまない

「わだしは 枕元の煙草をくゆらせながら、投げ出されたとぎちゃんの腕を見でいた」

まだ十七で肌が桃色だ 「何どがキセギはあらわれないものが」

ふみこ、腕をパンと掴む。

ときちゃん! 「ゆみちゃーん…!」ときちゃんの桃色の腕を掴んで逃げ出した

夜の新宿を走って走り抜けた 上京してたちまち5年の時が流れていた 二十三歳 無名 文無し ふみこ
本郷の酒屋の二階 たいこさんの新居にときちゃんとふたり、疲れ果てて転がり込んだのでございまーす♪

「ゆみちゃーん あだしうーんと働ぐわねえー あなたはうーんといい本書いでねえー」

ふみこ、ペンを走らせながら、

と、誓い合ったときちゃんは、みるみる変わってしまった 毎日明け方まで帰らない

「おふみさん 大丈夫 自分の意志通りに生きれば後悔などしないよ」

と、励まし合ったたいこさんは、作家ひらばやりたいこととして先に世に出て、お嫁に行ってしまった
南天堂の物書きたちもぼろぼろと世に出ていった

ふみこ、ペンを止めて、

ああー 今晚も待ち呆け 夜中三時

「さようならアときちゃんー」男の声が窓の下で消えた

ふみこ、戸を開けて、

(小声)「…あ ゆみちゃん まだ起きて書いてたんだ」…ときちゃん、どしたの その指輪と紫のコート

「ふふ 内緒 おやすみ」

ふみこ、ペンを走らせて、

二月×日 ときちゃんが帰らなくなって今日で五日 ひたすらときちゃんのたよりを待っている

あんな指輪や紫のコートに負けてしまったのだ

ときちゃん 貧乏は決して恥じゃないよ 貧乏は恥じゃない と、云ったものの

手を延ばして押入れをあけて見る

ふみこ、押入れをあける。

——何もないのだ ——涙がにじんできると 電気でもつけましょう

ふみこ、電気をつける。

食慾と性慾 時ちゃんじゃないがせめて一晩のめしにありつこうかしら

食慾と性慾 私は泣きたい気持ちでこの言葉を嚙んでいた ぼりぼり ぼりぼり

ふみこ、ペンを走らせる。

食慾と性慾 食慾と性慾 食欲と

ふみこ、書いていた帳面を手取る。

二月×日 (小声)ゆみちゃん 何も云わないでかんにんしで下さい 指輪をもらった人に脅迫^{きょうはく}されで、

浅草の待合に居ります そのひとは今四十二^{しじゅうに}のひとです 着物も沢山^{たくさん}こさえてくれましたの

貴女^{こど}の事も話したら、四十円位は毎月^{まいつき}出してあげると云ってました 私^{わだし}嬉しいんです

ふみこ、帳面を腿に何度もぐしゃぐしゃに叩き付けながら、

ときちゃああーん こんな筈じゃなかったああー 涙が火のように溢れる

私がそんなことをいつ頼んだのだ！ 馬鹿ッ 馬鹿ッ！

所を知らせないで 浅草の待合なんて何なのよッ

きもの きもの、指輪もきものもなんだろう

十八の少女のときちゃんの きめの柔らかな桃色の肌 桃色の肌 四十二の男よ呪われてあれだ！

「ふみこさ——ん 書留ですよ——ッ」

下宿の小母さんの声に封筒を取り上げる

ふみこ、封筒を開ける。

——金二十三円也 ——原稿料だあ—————！！！！

ふみこ、祈るように封筒を両手ではさむ。

当分ひもじいめをしないでもすむ 神さま、あんまり幸福なせいか、かえって淋しくて仕様がな
い 神様神様、嬉しがってくれる相棒が四十二の男に抱かれているなんて

ふみこ、封筒を帳面に挟んで、紙面を手で撫で伸ばして、またペンを走らせる。

出版社の人から やさしい手紙がはいっている 元気で 御奮闘御精励を祈りまつる

——私は 窓をいっぱいあけて、上野の鐘を聞いた 晩はおいしい寿司でも食べましょう

ふみこ、ペンを置き、歌日記の帳面をそっと閉じながら、

♪さてそれからというもの～は

ふみこ、帳面を見つめてゆっくり高く掲げてゆきながら、

♪寝ては夢起きてはうつつ～ 幻の～～

——この本が ——「放浪記」でございます ふみこの青春放浪が詰まった放浪記

二十五歳 女だけの文芸雑誌「女人藝術」に掲載 二十七歳 単行本が改造社から出版

たちまち何十万部のベストセラー ザマアミロ 買ってくれたのは私とそっくりの、金や職のない若者や、
大震災から立ち上がってゆく庶民だったのだ ザマアミロだー

「おふみ おふみさーん」みんなが呼ぶ

映画や舞台にもなった 幸せ たまらない なぜか今無性一にでんぐり返りしたい気分

ふみこ、掲げていた両手をついてでんぐり返りしようとする。

へいッ …へいッ …へいーッ

ふみこ、身を折ったなんか無様な格好。

全然でんぐり返れないッ 脚が もう脚がさァ 土の中に根を張りだした

「おふみ あんたちっとも幸せじゃないんだね」はッ 誰

ふみこ、身を折ったまま見上げて、

「おふみ あんたちっとも幸せじゃ」幸せだってば！

ふみこ、昔のように拳を握って、

東京で一女成金に私はなった！ 子供の頃の野望を叶えたー もう鰻もたらふく食べられる 鰻鰻鰻ーあ

そうだ 結婚もしましたー ほらッ夫 りょくびんさんー

ふみこ、傍に抱きついて、

虚弱体質の売れない画家だけど これまでの男とは正反対 りょくさんはー 穏やかで飾らない

そうかそうかーって私の話を静かに聞いて支えてくれる

そうして私は山のように書く 海のように書く！！

ふみこ、昔のようになんか変てこに弾んで泳ぐように腕を振り、

新聞の連載小説「^{せんしゅんぷ}浅春譜」 自伝的短編「風琴と魚の町」 りょくさんとの日々を描いた「清貧の書」

もうねえ ふみこは流行作家でございまーす♪

ほら幸せ 天地がでんぐり返るほど幸せですよ誰よりも

「おふみ おふみさーん 新宿で淫売してたって?! 銀座で野外放尿してたってー?!」へ…

「帯がとけとるとどおー」「尻が見えとるとどおー」

ふみこ、昔のように裾をバツと押さえつける。

「放尿記 ルンペン作家 貧乏自慢 不細工 雑草ー」はあー?! 悪口の大嵐だ

ハァー ハハハ… 燃える ——さあ発展だ 一ツ所で埋もれてられない 次の地へ行くんだ!

(穏やかに)「ふみこ」りょくさん… 「どこ行くの」どこさか追いつけんとこさはぐれて行くの 「そうか」

放浪記の印税全部ツツ込んで遠ーく飛ぶの 「そうか」 香港 中国 第一次世界大戦の傷跡生々しいユーラ

シア大陸 ほら ゴトンゴトンと汽車が続々と鉄橋を渡ってゆく

ボンソワールムッシュー ジュマペールフミコ

ふみこ、スタンドマイクに手をかけて、小さなシャンソニエのように、

♪巴里の空ーの下ふみこはーいーるー まだ日本の女は珍しいー

巴里の街ーをふみこは下駄で一步ーくー 芸術をー深く学ぶー旅ー

「コマンターレブー りょくさん 巴里へ来て半年、

今日も私は一人街を歩き、まだ知らぬ芸術や文化を一人学んでいます

巴里日記や紀行文を一人書いては日本に送り、原稿料で食い繋いでいます

二十九歳ふみこ 帰国したら必ずや、放浪記の雑草から 脱却して」

♪巴里のー花のー作家ー ふみこになーれーるーはずよー

巴里の空ーの下ふみこはーひとーりー 学んでいますー というのーは全部ー嘘ーー!

ふみこ、頭を下げながら、「パリの空の下」日本語詩=角)

嘘 一人も嘘 巴里日記の中身も嘘 実は恋であった ロマンー 画家のとやまさんー
恋を追っての巴里であった 捨てられては惚れた 考古学者のもりもとさんー 新聞社特派員くすやまさんー
ああもうめっちゃくっちゃになってしまいそうだ 建築家のせいいちさんー
人に云えない日付の日記は、セーヌ川に破って捨てた

「おふみ おふみさーん ふしだら 不貞 不倫ー」川向こうから私は石を投げられる くっだらなーい
息苦しい貞操や常識なんか親から教わってなーい！ ふみこは生まれついでの旅商人でございまーす♪
世の真人間のつまんない性の掟なんか 金にならないじゃアないの！

ふみこ、煙草を吸って、

ふー 果てしない恋愛放浪こそが ふみこの文学だ「そうか」

——嘘 それも嘘 実は失敗 失敗失敗だらけ 巴里で足掛け八ヶ月 浮わつた雑文しか書けなかった
雑草脱却には儲けなし 口が裂けても言えない「そうか」

ふみこ、煙草の手をすりと下ろして、

りよくさん… ねえ ——全部知ってて、目をつぶって黙ってるんでしょう

ふみこ、冷やかに傍を見て、

——りよくさんは、風が吹いたほどにも目の色を動かさなくて、茶を呑んだ

巴里から帰った私は、目を開けていることさえ苦しい

瞼の中で大量の文字が飛ぶ 涙が眼からこぼれ落ちる

ぼろぼろ ぼろぼろ 私は何を書けばいいんだっけ

ふみこ、^{くう}空をつまんで噛み砕く。

——ぼりぼりぼり

「何食べてるの ふみこ」粒 物語の粒 「そうか」みるみるきくきく夢の葉ー

ふみこ、飲み砕きながら、昔の風船玉のように^{くう}空を見て、

——ぼうぼうと ——暴風が吹きつける ——フォンテーヌブローの森の奥で

私ね、ジャン・コクトーに会ったの フフフ 「フミコ そこに腰掛けてくれ」

コクトーはキラキラと情熱的な、おそろしい目だった

ふみこ、両頬に手をかけて、

コクトーは囁いた 「詩人は常に 真実を語る嘘つきだ」

コクトーは本物の目をしていた

私は真実も何もわからない 垢だらけの目のままだ

ふみこ、両頬の手を前へ伸ばして、コクトーの頬へ伸ばすように、
本物の目がほしい もう雑文ばかり書いて稼ぎたくない 本物の文学を書きたい

ふみこ、するりと両手を下ろしながら、
吹き荒れるように思ったの「そうか」

ふみこ、おそろしい眼で傍を見る。そしてまた前を向く。
——それから私は、嵐のように書いた

暴風にあえいで 苦しいため息をついて うごめいている庶民ばかり書いた
母を描いた小説「稲妻」 父を描いた「鶯」 親に愛されない子を描いた「泣虫小僧」
時代の流れに取り残されて、心を病んでゆく職人を描いた「牡蠣」は絶賛されて、放浪記の私小説から
客観小説へと脱却した！

ふみこ、おそろしい眼で、懐で拳を握る。
貧しい片隅から生まれた私は、貧しい庶民を味方につけて進むのだ
三十五歳ふみこ 庶民に根ざした実力作家になったのでございませう♪
ほら私のこの脚元から、町の土に根っこがぐいぐい伸びて分かれて広がって、涙も唾も糞尿もごくごく
吸い上げて一、強く根を張って倒れない文豪一となったのでございませう…そこで… 爆弾が落ちた…

ふみこ、止まって、見る。
爆発はまるで眩しい花火だ ドン ドン ドン と あっちもこっちも燃え上がる
逃げ遅れて胸をぐちゃぐちゃにやられた支那兵が転がり出る わけのわからない叫びをあげている
「じうーみんあー」誰かに似ている 誰 誰だっけー何て言ってんの？ わからない！

だめだめ 歩けふみこ 次の地だ

ふみこ、なんかレビューのような手振りで踊って行軍する。
ここは戦線なのだ 支那事変 漢口攻略作戦！
♪オイチニイ オイチニイ 全日本国民のみなさまー
庶民の星ふみこは、内閣情報部が企てた、人気作家たちによる従軍ペン部隊の一員に 選ばれたので
ございませう♪

いつ本当のことが書けるかそれは知らない 知らない地を放浪するのは生まれついでの大得意だ
去年の南京陥落の時にも、毎日新聞特派員としてやって来ました

そして今回女としてはただ一人、私は朝日新聞の従軍記者として来たのです

他の男性作家たちに無断で単独行動をとり、最前線の兵隊と共にトトトトトトト（身悶えて）

機銃掃射の音が響く

ふみこ、両脇を振り返って、書きながら、

たくさんの支那兵がうち倒れています 溢れる血 裂けた服 手は手 足は足と、ばらばらです

ぼろのような支那人たちの死骸が山積みです それを見ても私は、犬猫ほどにも何ソ一の痛みも感じません

たった一人の 日本軍の負傷兵への悲しみは一生忘れられないのに

けれど！ これが戦争なのです！ 仕方のないことだと思うのです

みなさんー 美しい日本の為に今、泥をつかんでも勝たなければドン（身悶えて）また砲撃が ドンドン

「ふみこさんッ」

ふみこ、肩を抱かれて伏せる。

「もしものことがあったらどうします?!」同行の朝日の記者わたなべさんが言う

そのときは 殺して行ってください！

ふみこ、指でOKサインを出して、

「オッケー 命はあずかりましたよ」（笑って）

殺したら放りっぱなしにしないで クリークでも沼の中でもぶちこんでね「オッケー ぶちこみます」

戦場でたったひとりの女として、無様な死によは「ふみこさんッ」トトトトトトト

ふみこ、伏せて身悶える。

身をかばわれて重なった 男の匂い 骨 筋肉 温かい 懐かしい 私はギリギリで生きている

トトトトト（身悶えて）震えと熱情がつき上げる わたなべさんー 恐ろしい

「ふみこさん 書いてください」こんな中で?! わたなべさん「僕がここから日本へ電信を打ちます」

ふみこ、指でOKサインを出して、

オッケー 私は太ももを机代わりに書く

ふみこ、なんか変な体勢になってゆきながら太ももに指で喘ぎ書いて、

私は兵隊が好きだ 一つの運命が、一瞬の速さで、戦場の兵隊の上をひゅうひゅうと飛びかい、

生命、生活、生涯を、さんらんと砕いてゆく

私は兵隊が好きだ 荒涼たる土に血をさらすとも、民族を愛する青春に噴きこぼれ、旗を背負って黙々と

進軍してゆくのだ ♪オイチニイ オイチニイ

ふみこ、再び立ち上がって変てこに手を振って踊って行軍する。

私は兵隊が好きだ 私は兵隊が好きだ 私は兵隊が好き

ふみこ、鉛筆で前を指して、

「ふみこ女史、漢口一番乗り——！」朝日新聞に見出しが踊った 要塞漢口陥落！

ふみこ、オッケーサインを挙げて、

愛する日本のみなさんー 洪水のような兵隊の大進軍でございまーす

「ふみこさんの漢口入城は、全日本女性の誇りである」紙面にでかかど私の顔写真が載りました

ちなみにこの瞬間、朝日新聞は爆発的に売れに売れたそうでございます

今日ここ 朝日会館に お集まりのみなさま、本当一にありがとうございます

ふみこ、演台のマイクに手をかけて、

まさか夢にも思いませんでした 内地へ帰った翌日に こうしてまあ大きなコンサートホールで

ねえ 三階席までこーんなに超満員で、武漢陥落報告会の講演に立たせていただいているとは

ふみこ、上方の上手下手を手で指したりして、

私はたくさんの人々に、この戦争の話を、女のアンデルセンのように、歳をとって腰がまがるまで話し続ける事でしょう

ねえ この戦争の使命は 老いたる大陸に一つの新しいバイブレイションを捲きおこすのですよ

今なお戦線にいるどの兵隊にも 拍手を送りたい気持ちです

ふみこ、礼。拍手し続けながら、

バイブレイション！ バイブレイション！

連日超満員の講演会 従軍手記「戦線」出版 放浪記に次ぐ大ベストセラー

ふみこは帰還兵さながら、大衆に熱狂で迎えられたのでございまーす♪

——嘘 嘘嘘 みんな内心は嘘

日の丸の小旗を振りながら、冷やかな憎悪の目で町の女たちは見ている

万歳や拍手をしながら、軽蔑の目で村の男たちは見ている

私は見て見ぬふりをした 書き上げ、歌い上げ、踊り上げた

そのまま一直線に、世界は第二次大戦へつき進んでいった

ふみこはまた従軍作家として、南方へ8ヶ月も行ったのでございまーす♪

シンガポール マレー ジャワ ボルネオスラバヤスマトラフィリピン

その瞬間も、もちろん私は恋をした 毎日新聞特派員のとういちろうさんー

四十歳ふみこ 命がけの恋だった あいびきの合言葉は ゲンコウオクレ ゲンコウオクッタの電報

そのまま一直線に、…美しい日本は負けていった

拍手、空しく乾いてゆき、止まる。

沈黙。暫く。

ふみこ、空を見上げる。

——爆発は まるで眩しい花火だ

たくさんの日本人がうち倒れています 溢れる血 裂けた服 手は手 足は足と、ばらばらです

ぼろのような日本人たちの死骸が山積みです 「じうーみんなー」その意味を 今になって知りました

…たすけて…

「おふみ おふみさーん 兵隊と寝たおふみさーん」へ…「帯がとけとるどおー」「尻が見えとるどおー」

ふみこ、昔のように裾をバツと押さえつける。

「おふみさーん ペン部隊で国から莫大な金もらったんだってー?!」

「南京虐殺を見たのに書かなかったんだってー?!」

「国家と手を結んで戦意高揚を書き立てたってー?!」はあー 反感の嵐だ

ふみこ、空をつまんで噛み砕きながら、

「兵隊賛美 軍国主義の宣伝女 戦争商人 凱旋将軍 危険人物 戦犯作家」

戦犯?! ハァー ハハハ 四十二歳ふみこ戦犯 戦犯? 違うッ!

「何ば食うとるかのー ふうちゃん」…お母さん なんてこんなところにいるの

「何ば言うとるかのー お前が東京さ呼んでくれたけん」危ないッ 疎開先の信州にいないと

「またこん子はー ふうちゃん 戦争は終わったと」(笑って大らかに 以前も以降も)

ふみこ、空をつまんで噛み砕きながら、

そう終わった 終わったと トトトトト (頭を抱えて) 父さんは? 父さんー

「父さんは戦前にとうーに死んだと」

そう死んだ みんな死んだと? トトトトト (両手を挙げて) ああ みんな死ぬ 虐殺だァー

ふみこ、ハツと口を覆い首を振って、

いいえ 何も いえ 見てません (笑って) いえいえいえいえいえいえ

「ふうちゃん 何ねー 落ち着かんね」だめ だめだめ空襲が

「大丈夫 ここはアンタの家たい」（笑って）家なんかいない 子供の昔から

「家たいね ほれここはがアンタの 丈夫で立派な下落合の、」いえ いえいえ（笑って首と両手を振って）

「アンタが建てた、人も羨む豪邸たい 東西南北に窓のあって 風の吹き抜ける」わ窓ッ 窓しめて 窓 窓 窓

ふみこ、四方を閉めまくって、

はあ一助かった 「おふみ おふみさんー」わ風ッ なんでエ もうッ風が 東西南北 暴風が吹きつける

ドン ドンドン 「戦犯 戦犯戦犯」

ふみこ、四方に頭を下げまくって、両手で押しとどめながら、

ちょごめんなさい ごめんください みなさん出てって

「誰っちゃおらん アンタの書斎たい」 そうだ私の書斎だッ

ふみこ、空をつまんで噛み砕きながら、

どうしよう 今日も×切がある 書かないと「書きすぎたいー ふうちゃん寝んと もう寝れッ」寝れるかッ

ふみこ、噛み砕きながら四方を見て、

戦争で痛めつけられた人 人生を狂わされた人 言葉をもたない人 人人人 死んでしまった人——

すいませんお静かに お静かに どうかお願いみなさんー

「ふうちゃん 誰っちゃ喋らん 竹の音たい ふうちゃん自慢の 庭の孟宗竹の竹やぶの」

ふみこ、傍の窓を開けて、

孟宗一竹！（笑って）だめじゃんーそれー！ 切れ 全部切れ 今切れッ

「ふみこ 何してるの」——りょくさん

ふみこ、空をつまんで噛み砕きながら冷ややかに、

そっちこそ 何してるの

「薔薇の手入れだよ」——薔薇？ 今薔薇？

「離れの僕のアトリエの 庭の薔薇園」——薔薇園

ふみこ、竹と逆の傍の窓を開けて、

オエッ

ふみこ、口を覆って、

ごめんなさい 吐き気が 「ふみこ」オエーごめん オエエー——「ふみこ」

ごめんごめん 私 なんだか 食べても食べてもお腹が空きすぎてー

ふみこ、床へ身を屈め、空をつまんで大量に噛み砕きながら、

ぼりぼりぼりぼり 「何食べてるの ふみこ」

夢の薬 ♪みるみるきくきくオイチニーの一葉薬「おいッ」

ふみこ、薬の手をパンと掴む。

「これ」物語の粒 みえるみえるきこえるきこえる夢の薬ー！ 「薬って」

ヒロポン！ 疲労がポンの ヒロポン！「そうか 薬ってそうだったのか…！」

ふみこ、手を振り払って、

ていうか竹を切れ！ お前は孟宗竹を今すぐ切れッ「ふみこ」

ふみこ、身体を抱き止められて、

離して 私にくっつくな 「ふみこ」オエッ 誠実な顔して 庭づくり以外働かない「ふみこ」オエッ

濡れた紙みたいに 私の稼ぎに貼りつくな「ふうちゃん」オエエー

ふみこ、腕を振りほどいて吐き、

人がみな恐ろしい 夢をみても恐ろしい うつつでいても恐ろしい「おふみ おふみさーん」

そばに誰かがいる錯覚がする いつもどこでもずっと

「ふみさん」

あ… とういちろうさん… 「ゲンコウオクッタ」 ああ… ゲンコウ

「いい処だね ここは」ほんと？ いい？ とういちろうさん

ふみこ、ふっと静かに落ち着いて、

「どうしてこんな宿を知ってるの」宿？ ああ… ここは秘密の… 執筆の隠れ家

かわばたさんに教わったの 「かわばたさん？ 今の男」馬鹿ね 雪国のかわばたさんよ

「ああ 国境の長いトンネルを抜けるとそこは」ほら 汽車の鉄橋 窓の下は川

春にはあの向こう岸に、桜が咲いて美しいんだって 「へえ」

ふみこ、手をそろりと脇腹に触れる。ゆっくりと、下腹部へ手を這わせながら、

——とういちろうさん

「四月か 五月頃だったね」なにが 「生まれたの」

五月「そう」

(腹を撫でながら)「何事もなかったみたいに空っぽだ」

——ハァー 息苦しい

ふみこ、手を左胸へ。左胸を撫で掴みながら、

——ねえ 本当のことが言えないって 息苦しいわね 「仕方ないさ」

戦争協力作家だなんて言われても 何ンーにも言い返せずに 黙って生きなきゃいけないなんて

「時代のせいだよ」卑怯ね「身から出た錆だ」やめて 「苦しいねえ（笑って撫でて）」やめてってば！

ハア ハア ハハ

ふみこ、左胸を掻き掴み、手を退けて、

私たちは間違いだった 国も世界もみんなみんな間違いだった

「ふみさん 兵隊が好きだなんてあんなに書いといて」

制約だらけだった 従うことが国のためになるって思い込んでた

「従っというてさ」私は失敗失敗 失敗だった！

もう親一代で戦いはたくさん！ これから一生かけて、この戦争のあやまちを書くの

「君の書いたものなんて、10年も残らないさ」10年かああ…… 10年でもいい！

平和に子供はすくすくと育つの 物心ついたら、行きたい方へ行かせてやるの

「平和に育てられるかよ」平気よ 一人で平和一に産んだのよ 一人で秘密の産院で

そうして いかれたふみこが 生まれたての赤ん坊をどこからかもらってきたことにしたの 「へ」

男の子 名前はたい 天下泰平の一 たいちゃん！

「嘘だらけだね」嘘？ フフ すべてが本当である必要は何ンーにもない！

だって現実ばかりじゃ息苦しいじゃない！ 作家は現実をつづめて書くの

そうして、——あなたや 私みたいな 空しい人を たくさん許して励ますの

ふみこ、立ち上がる。

「ふみさん 元気でいてください それから いい仕事をしてください」

とういちろうさん

「——ゲンコウオクレ」

——ゲンコウオクル

ふみこ、空をつまんで噛み砕きながら、

ゲンコウ ゲンコウ ゲンコウ ゲンコウ ゲンコウ

私は書いた 戦争をはさんで 時代に巻き込まれる男と女ばかりしつこく書いた

もうここにしか私の立ち位置は残されてない 天にひれふして書いた

ふみこ、昔みたいに、なんか変てこに弾んで駆けるように腕を振り、

最高傑作、夫の出征中に義父との子を産んだ女の苦悩を描いた「河沙魚」^{かわはぜ}

これも最高傑作、元芸妓と昔の男の戦後の再会と幻滅を描いた「晚菊」

これこそ最高傑作、南方の戦地で出会った男女の戦後の虚無を描いた「浮雲」

他にもめっちゃくちゃたくさんたくさん最高傑作を書いた 他どの作家も追いつけんとこまで

四十八歳ふみこ、もらい子たいちゃんを抱いて、夜も眠らず書き続けたのでございまーす♪

(小声)「おかあちゃま」…あ

ふみこ、するりと腕を下ろして、

「おかあちゃまおきて」 たいちゃん？

ふみこ、立ち尽くしている。

目覚めたら河原にいた どの河原 絶望的に覚えがない ぼうぼうと暴風が吹きつける

今私は宿命を恨む なぜか一步も進めないの 足はもう土に埋もれて腐ったみたいだ

——淋しく候 腹がへったで候 御不浄へゆきたいで候

ふみこ、ゆこうとするがゆけない。

——あ あそこ 川向こうに人がいる 誰 男 ロマン—

ふみこ、手を伸ばす。

川の端ぎりぎりまで歩いて来る！ (手を振って) あ… かわばたさん—！

「故人は、自分の文学生命を保つため、他に対しては、ときにはひどい事をしたのでありますが、

しかし、あと2、3時間もたてば故人は灰となってしまいます

死は一切の悪を消滅させますから、どうか、この際、故人を許してもらいたいと思います」

…へ 何それ かわばたさん 「葬儀委員長 川端康成」(礼)

…フフ 流石ね ひどい 最高 かわばたさん

「おふみさん 大丈夫」(手を振って) あ… たいこさん—

「その最後の瞬間まで、あなたがその血の一滴までをあげて、文学の彼岸にある人間最大の幸福をつかみ寄せ度いと願っておいでになった情熱の声は、私達にとって本日以降の永遠のものとならずにはおか

ないでしょう 友人代表 平林たい子」(礼)

わー みんなが川向こうに並んでこっちを見ている

「ふみこは心臓麻痺でした 小説「めし」など4本の原稿の×切の途中でした」りょくさん

「ふうちゃんは 取材で記者さんと 深川の鰻屋「みやがわ」で 大好きな鰻ば食うて帰ってきたあと

息苦しいって眠ったとです」お母さん

(小声)「ゆみちゃーん」あ… ときちゃん――

「お祭りみだいだわね」へえ？ 「下落合のあなたの家まで、坂も道も参列者でいっぱいだった」

「おふみ おふみさーん」

あ… 近所の人 買い物ついでの人 仕事の合間の人 子供を抱いた人 町や村の人

若い人 おじさんおばさんお年寄り 戦争で痛めつけられた人 人生を狂わされた人

言葉をもたない人 人々 死んでしまった人 たくさんの庶民が列をなして立っていた

そばに誰かがいる錯覚がした

その時、ゴトンゴトンと川に架かる鉄橋を汽車が渡ってきた

――あ あそこ 汽車のデッキに誰か立ってる こっちを見てる 男の子

ぼうぼうと暴風が吹きつける 危ないッ たいちゃん！

ふみこ、咄嗟に手を伸ばして、初めて数歩、駆け寄る。

――あ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ――

ふみこ、うろうろと歩いて回る。

ゴトンゴトン たい 十四歳 汽車のデッキで転げ落ちた

――神様コンチクショウ――

ふみこ、振り返る。

――振り返ると ――私が立っていたそこに、一本の桜の木が立っていた

ふみこ、自分が立っていた^{くう}空を見ている。

あたりいっぱいの花びらが 風に散って舞い狂う ほろほろと 吹き上げては 吹き下ろす

♪花の命は短くて 苦しきことのみ多かりき

ふみこ、^{くう}空を見上げて小さく歌う。

ふいに 引き戻る 雑魚寝の女給部屋 たくさんの女が折れた鉛筆みたいに転がっている

私や ときちゃんや 女達のおしゃべりの声が聞こえてくる

人間ってつまらないわね

「でも木のほうがよっぽどつまらないわ」

火事が来たって 大水が来たって 木だったら逃げられないわよ

「馬鹿ね！」ふふふ誰だって馬鹿じゃないの

女達のおしゃべりは青空のように朗かである

女達は白粉をつけかけたまま皆だらしなく寝そべっている 窓から涼しい風が吹き込んでくる

「ふみちゃん いい人があったんじゃないの 私そう睨んだわ」

あったんだけど みんなみんな遠くに行っちゃったわ

また 花びらが風に吹き上げては吹き下ろす

いっぱいの花びらが 川に浮かんでどこかの町へと流れてゆく ほろほろ ほろほろと放浪する

ふみこ、くるくると歩く。

平凡な、誰にも知られない死で世の中は満ちている

自然と人間が、愛らしくたわむれる世の中が私のユートピアだ

桜が終わるともうじき五月

ふみこ、バンザイみたいに両手を上げる。

私の生まれた五月です

ふみこ、ふわりと回って。

終わり ありがとうございます

ふみこ、礼。

○ 引用

林芙美子「放浪記」「続放浪記」「放浪記第三部」「風琴と魚の町」「彼女の履歴」

「夢一夜」「戦線」「あひびき」

川端康成「雪国」 弔辞

平林たい子 弔辞

○ 参考

林芙美子「清貧の書」「河沙魚」「女中の手紙」「三等旅行記」「巴里日記」「牡蠣」「女の日記」「浮雲」

「田園日記」「文学的自叙伝」「蒼馬を見たり」

「晚菊 白鷺 水仙」(講談社文芸文庫) 「林芙美子詩集」(現代詩文庫)

平林たい子「林芙美子」(新潮社) / 川端康成全集第29巻「林芙美子」(新潮社)

檀一雄全集第7巻「小説 林芙美子」(沖積舎) / 「現代日本文学アルバム 林芙美子」(学習研究社)

尾形明子「華やかな孤独 作家林芙美子」(藤原書店)

「戦争の記憶と女たちの反戦表現」(ゆまに書房)より 尾形明子 「林芙美子論の試み 厭戦から平和への意志」

高山京子「林芙美子とその時代」(論創社) / 文藝別冊「林芙美子」(河出書房新社)

今川英子「林芙美子 巴里の恋」(中公文庫) / 菊田一夫「菊田一夫戯曲選集 第一巻 放浪記」(演劇出版社)

吉屋信子「自伝的女流文壇史 林芙美子と私」(新潮社) / 池田康子「フミコと芙美子」(市井社)

有吉佐和子「花のいのち一小説・林芙美子」(中央公論社)

太田治子「石の花 林芙美子の真実」(筑摩書房)